

# 追求を許された色

05 The Search For The Color

「黒」という色には絶対的な「黒さ」の定義が存在します。それは”光を反射しない方がより黒い”というものです。私達はものに色を感じる時、そのものが反射している光を感知することによって色を感じています。その反射光の量や波長によって色を識別しているのです。そして黒や白といった明度は光の量に、それ以外の例えば赤や青などの色みは光の波長に対応しています。ですから同じ赤の波長でも、より光の量が多いものを「白っぽく」、より光の量が少ないものを「黒っぽく」感じるようになっています。ではここで、最も赤い「赤」や最も青い「青」という色について考えてみましょう。それは赤の波長もしくは青の波長の光であり光の量（明度）もそこそこ、といった色だと予想できます。結局、最も赤い「赤」や最も青い「青」というのは人それぞれ認識に幅があり、明確に定義する事ができません。しかし今度は黒の場合について考えてみると、光を反射しない方が黒く見えるのですから、最も黒い「黒」というのは「一切の光を反射しない存在」として定義できてしまうのです。このような「一切の光を反射しない存在」というのはあくまでも理論上の存在ですが、そこに近付けば近づく程「黒い」ということは明らかなのです。黒は追求する事を許されたストイックな色であると言えるでしょう。

黒紋付の歴史は「黒さ」の追求の歴史でもあります。日本では、黒紋付は「高貴」の象徴として扱われていました。深みのある黒を出すためには何度も下染めをくり返し色を重ねていく必要があります、大量の染料を使う黒染めは非常に高価なものになります。当時の技術では何度も重ね染めをくり返した生地が非常にごわごわとした堅いものになり、黒染めの着物は刀を通さないと言われた程でした。それでもなかなか「黒」まで染める事は難しかったのです。また「黒」は並べて見ると黒さが濃い方はより黒く、薄い方はより灰色に近く見えるという特性があるために、いつか紋付においては黒ければ黒いほど上質であるとされるようになります。こうして染めの黒さを競った結果、日本の黒染めは世界最高レベルの「黒さ」を実現するようになるのです。